

## 交換の伝播 –美的感性論拡張の可能性

同志社大学 岩崎陽子

yokko\_iwasaki@yahoo.co.jp

### 0. はじめに

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』(1945)において「現象学はバルザック、プルースト、ヴァレリー、セザンヌの仕事と同じように、世界と歴史の意味をその生まれいでのとする姿において把握するという目的を持つ」(PP37)と述べ、現象学と芸術論とが同じ課題に従事するものであると主張している。もっとも彼の一連の芸術論、すなわち「セザンヌの疑惑」「間接的言語と沈黙の声」「眼と精神」はいずれも諸感覚の中で視覚の問題を中心にして論じられる絵画論であり、幾つかの文学論を含めても、視覚・触覚また時に聴覚モデルに特化したものであることは明らかである。しかしながら例えばプルーストが『失われた時を求めて』の中でマドレーヌの味と匂いを契機に世界の再構成を行ってみせたように、生も芸術も元来視覚・聴覚といういわゆる高級感覚に限定されない、味覚・嗅覚も含めた仕方での複合的・総合的感覚性に負っているはずなのではなかろうか。美的感性論は、視覚・聴覚(時に触覚)偏重の枠組みを超えて、より包括的な身体論の中で論じられるべきであると思われる。それではこうした包括的な身体論の契機を、改めてメルロ＝ポンティの思想に見出すことは可能であろうか。

本論ではまず、メルロ＝ポンティの後期思想である『見えるものと見えざるもの』における「肉」の概念についてテキストに沿って確認し、特に芸術に関わる「肉の昇華」に着目する[第1節]。次にメルロ＝ポンティの肉の概念をより広い視野でとらえる思考モデルとして Nathalie Depraz によるフッサールの身体意識に関する論を検討する[第2節]。Depraz の論は嗅覚・味覚を中心テーマとする数少ない研究の一つであり、ここではフッサールの「肉」(Leib)の概念に内在する非-局在的な感覚意識における伝播性が嗅覚・味覚に特有のあり方として導きだされている。最後に Depraz によるフッサール分析を再度メルロ＝ポンティの肉概念に適用・敷衍し、『見えるものと見えざるもの』の中にある伝播の概念について、従来の視覚・触覚重視のメルロ＝ポンティ解釈よりも踏み込んだかたちでの考察を行うことにより、美的感性論の拡張可能性を検討する[第3節]。

以上の考察を通して、もはや視覚に絵画、触覚に彫塑、聴覚に音楽、嗅覚に香道、味覚に美食をというように、諸感覚を局在化して諸々の芸術活動と結び付けるような従来の芸術論が乗り越えられなければならない。本論が目指すのは、より多様で豊饒な芸術のあり方を露わにするための、従来の美的感性論の射程を超えた方法論の試みである。

## 1. 肉の昇華と伝播 –メルロ＝ポンティ

根底としての現象的身体とその表層にある客観的身体という『知覚の現象学』で示された静的な「層構造」は、『見えるものと見えざるもの』(1961)における「肉」の概念において、「円環構造」という動的な可逆性を帯びる。見えるものが見る身体に巻きつき、触れられ得るものが触れる身体に「巻きつく」といった肉のあり方(VI189)は、私の身体において端的に表れる。すなわち私の左手が事物に触れている最中の私の右手に触れんばかりであっても、両者の一致は決してありえない。私はいずれの領域にしか属することができず、二領域に一挙に身を置くことはできない。しかし両者を好きなだけ行き来できるということ、これが円環構造を支える「可逆性」である。そしてこの可逆性という行き来を保証する見えない「蝶番」(VI192)のようなもの、両者をつないでいる「生地(ssu)」こそが「肉」である。もともと「肉」は、先の手例のように、私の客観的身体と現象的身体との間でのみ成立する事柄ではない。私と物と、そして私と他者との間にも、同じ織地としての肉の可逆性が存在している。

メルロ＝ポンティによれば、この「肉」はこれまでのいかなる哲学も名指ししたことのない概念であり、それは客体と主体を形成する場(VI191)、時空間の個体とアイデアとの中間にあるもの(VI182)とされる。ここでは肉が物質でないことが強調されるが、その一方で肉は感覚可能なものなしにはありえず、むしろ感覚可能なものを裏打ちする「見えないもの」である。見る者としての私の身体と、見えるものすべてには、相互的な挿入関係、編み合わせがあるが、両者は二つの円、二つの渦、二つの球のようなものとして考えることができる。私が素朴に生きている間、それらは中心を同じくしているが、私が自分に問いかけるやいなや、わずかにその中心を互いにずらせる(VI180)。中心がずれることによって何が起こるか。見えるものを通じて(類似という仕方)肉という見えないものを垣間見る。これを可能にするのが「肉の昇華」である<sup>5</sup>。

もともと見るということが見られるという可逆性を含みこんで成立している以上、そこには主体が世界によって存在を突き付けられるという反省の契機が存在する。しかし普段は隠されたままである肉の持つ反省構造が明るみに出されるためには、肉はより高次の段階へ移行しなければならない(VI277)。いわば肉を反省する肉として、「肉の昇華」(VI191,203)はある。そこでは肉が観念(idée)として、しかしどこまでも感覚可能なものを通じて現出する。「観念とはこの水準、この次元であり、したがって別の対象の背後に隠れた一個の対象のような事実上見えざるものではなく、また見えるものと何ら関係のないかのような、絶対的な見えざるものでもなくて、この世界の見えざるものである。つまり、この世界に住み、この世界を支え、この世界を可視的たらしめている見えざるもの、この世界的で固有の可能性、その存在者の『存在』である(VI196)こうして素朴に生きている間はぴったりと重なり合って気づかれる事のなかった見る者と見えるものの編み合わせが、中心をずらすことにより今度は見えるものと見えないものの編み合わせとなり、感覚可能なものを通じて観念として表現される。この表現は他者に向けられたものであり、肉の昇華の段階は「独我論の果てるところ」(VI188)と位置づけられる。この事態が言語活動や芸術が目指している事態に他ならない。

さて、しかしながら注意したいことは、ここでのメルロ＝ポンティの肉の概念が、どこまでも視覚、触覚を思考モデルとして構成されていることである。先の手例でいえば、彼にとって触覚が根本モデルであり、視覚はそのヴァリエーションとして理解されているといえよう (VII73)。このように肉の概念が視覚と触覚をモデルとされるのは、見る者と見えるものをつなぐ肉が成立するためには、両者の間に「隔たり」が必要だからである。「肉の厚みは、見る者と物とを隔てる障害物ではなく、かえって両者の交通手段なのである。」 (VII76) 肉の厚みが交通手段であるということ、肉において私がものに伝わり、またものが私に入り込むという事態は『見えるものと見えざるもの』では、私の諸器官や他者をも含む「交換の伝播」として位置づけられる (VII86)。しかし後に見るように肉における伝播については、遺稿として残されたメルロ＝ポンティの考察が十分であったとは言い難い。これについては伝播性について別の角度からさらに分析を進めた N. Depraz のフッサール解釈を先に考察し (次節)、それをメルロ＝ポンティに適用することにより、最終的にメルロ＝ポンティの肉の論のさらなる可能性を展望することにしたい (次々節)。

## 2. 肉における伝播性 – N. Depraz のフッサール批判

N. Depraz はフッサールやフランスの現象学を専門とするパリ第4大学の教授である。2001年に出版された *LUCIDITÉ DU CORPS De l'empirisme transcendantal en phénoménologie* フッサールの身体論を基盤としてより多角的に神経生理学、児童心理学や動物行動学の知見を援用し、理性とは別種の身体による認識のあり方について論じている。本論では特に第一部にあたる「身体の超-感覚 (hyper-esthésie)」に注目する。そこでフッサールの身体 (Körper) と肉 (Leib) の関係を類型化した後に、層構造の肉のうちで、局在化されない感覚性について嗅覚と味覚をとりあげ、現象学の範疇におけるそれらの位置づけが試みられている。その画期的な分析について本論で検討してみたい。

まず第一部一章「肉の類型化-対象化された身体から対象化する肉へ」では、身体と肉の関係を二項対立的にではなく相互的「環」、いわば絡み合って深化していく層構造として類型化する。フッサールはデカルトのように物体と身体を一元的に *corpus* として考えていたのではなく、有機的・生物的身体を、物体としての身体 (Körper) と区別して、*leben* を語源とする肉 (Leib) と呼ぶ。こうした区別はフッサールの1907年「物講義」で既に見られるが、彼

の諸記述の中で厳密に区別されて使用されていたとは言い難い<sup>6</sup>。

Depraz はこれを、身体の内への主観化の過程として、フッサールのテクストを例示しながら以下のように層構造として図式化する【表】<sup>7</sup>。

	<i>corps physique inerte</i> ( 1 )
DÉS-OB.JECTION	
	<i>corps vivant organique</i> ( 2 )
SUBJECTIVATION IMMANENT	
	<i>corps vécu immanent</i> (savoir non-réfléchi/involontaire/habituel)
	( 3 )
SUBJECTIVATION RÉFLÉCHISSANTE	
	<i>chair corporelle</i>
	<i>chair spirituelle</i> savoir aperceptif
	savoir aperceptif individuel
	communautaire (4a)
	(4b)
SUBJECTIVATION SUBTILE	
	<i>flux charnel</i> savoir dé-réfléchi=affectif/émotionnel
	( 5 )

この表の層構造は、層上部のまるで鉱物のような生きていない「物体としての身体」から、最下部の対象化が不可能な「肉の流れ」にいたるまで互いに絡み合っただ各段階を構成している<sup>8</sup>。フッサールの身体 / 肉の関係の類型化の意図は、こうした層構造の段階の間に、身体の内への漸進的な変質 ( *altération* / *Veränderung* ) を見出し、物体としての身体と感情を結び付けてとらえることにある。

【表】の(1)~(3)の段階である、身体 ( *corps* ) の諸段階に共通な事象は

「柔軟性」 ( *plasticité* ) である。この三段階における身体は非反省的で意志的でなく、またハビトゥスとしてあるので、自発的に周囲の環境に溶け込み、比類のない原初的自在さを与える感覚-運動型式に組み込まれたノウハウ ( *savoir-faire* ) をもつ ( 例えば動物、子ども ) 。暑さ、空腹、快の感覚は内的仕方によって主体によって生きられており、そこでは当初、諸感覚が非-局在性 ( *illocalisable*, または散漫な *diffus* ) を帯びている<sup>9</sup>。このように(1)~(3)の段階の身体には反省されない、非-局在的で散漫な感覚が刻まれているが、一方で身体が志向性をもつにつれ、感覚が局在化されてとらえられていく<sup>10</sup>。

さて、ここで Depraz は後にフッサールが結局のところ非-局在性よりも局在的な感覚のあり方の分析を重視したことを批判し、ここにおいて散漫な ( *diffus* ) 感覚とされるものを転化し、より積極的な意義を見出そうとする。つまり(4) ( 5 ) にあたる肉の段階をとらえる超-感覚 ( *hyper-esthésie* ) として、「散漫な」ではなく、独自の概念として「伝播的な ( *diffusive* ) 」感覚を措く。Depraz にとって「伝播的な ( *diffusive* ) 」感覚は、従来は非-局在的で散漫な感覚とされてきた嗅覚や味覚をモデルに、時を越えてすべての感覚を統合する包括的感覚という積極的意味をもつものである。

肉の伝播性の分析は次の3点において進められる<sup>11</sup>。

①伝播性の動因役は嗅覚と味覚

②すべての感覚を共感覚に統合

③伝播性における感情的なものとの認識的なものの結合

まず①の「伝播性の動因役は嗅覚と味覚」についてDeprazは、フッサール批判を行いながらもその遺稿に唯一ある嗅覚の記述に多大な期待を寄せる。これはフッサールが自身の初恋の頃のことを、庭の薔薇の香りと共に思い出す箇所である<sup>12</sup>。フッサールは思い出の中の薔薇の香りと共に筋肉感覚や痛みの経験を、笑い等々を思い出し、「私はその中に生き、ある意味でそれらすべてを『私の肉の中に』経験する」と記している。ここには嗅覚によって被る暴力的ともいべき受動性（時を越えて現在の煙草の匂いさえ消し去る）と、共感覚的なあり方（過去と現在、庭の視覚、筋肉感覚等々を一挙に思い起こす）の点が看取される。そしてこれは、（薔薇の香りに嗅覚を、庭の光景に視覚をといた仕方による）感覚の局在化を真っ向から否定する事態であると考えられる。ここには散漫な（diffus）という否定的な意味ではなく、肯定的な「伝播的」（diffusive）というあり方を認めるべきなのである。局在化されないという点では、味覚も伝播的である。「包括的な次元が存在し、この次元は、一方で身体の外膜（皮膚）の全体に割り当てられ、他方で謂うなればその内部皮膜（肉）に割り当てられており、この次元が味と匂いの、客観化する局在化を疑わしいものとする<sup>13</sup>。」嗅覚と味覚をその根本モデルにもつ伝播性の特徴は、反-局在化の事実により感覚間の根源的交流の方向性（②）へと至る。

②の「すべての感覚を共感覚に統合」することについて。感覚はそもそも本来的に局在的なあり方をするものではなく、また他方で共感覚も素朴にいく種かの感覚が統合されるものでもない。肉における伝播性の特徴の一つは「ある感覚の他の感覚に対する浸食（empiètement）の諸々の様式」<sup>14</sup>である。とはいえこの場合、諸感覚が完全に融合してしまうのではない。その意味でDeprazは、「感覚が特定されないような快適さ（または不快さ）」や「関係する感覚機能とは異なるタイプの感覚の知覚を生み出すあり方」を指して共感覚としているのではない。ここで目指される共感覚は「根源的間-感覚性」として他と共に交流することによってそれら諸感覚の特殊性を無効にせず、一方でそれらの素朴な自律を弱めるとされる。<sup>15</sup>伝播性のこうした共感覚的あり方が、感覚に鋭敏さや深さをもたらす<sup>16</sup>。

③の「伝播性における感情的なもの（affectif）と認識的なもの（cognitif）の結合」について。これはまず肉の伝播性において一種の習得訓練（利き酒や香水の配合のような）によって、自らを肉として自覚し、自らの感覚能力をより鋭敏化、洗練化することが可能になるということである。したがって視覚・聴覚・触覚が感覚において感情と認識を切り離す訓練を積んでいるのに対して、味覚と嗅覚はむしろ感情と認識を結合させることにより、視覚・聴覚・触覚とは別種の訓練を経て自らの感覚に鋭敏になる。

Deprazの伝播性に関する分析は、③の水準で自分自身を自覚するという再-受肉化へといたる。この肉の反省による鋭敏化は、一般的に楽器の練習や体操の訓練など継続的な習練によって深められる。しかし本論では肉の伝播性を、技能習得的事柄に限定せず、再度メル口＝ポンティの肉の概念と芸術論に立ち戻った上でこれらを発展させたい。

### 3. 交換の伝播

フッサールは肉を、身体が超越論的還元によって意識へ現れる一様態としてとらえ、メル口=ポンティは肉を主体と客体を構成する基盤としてとらえてあくまでも身体の感覚性を通じて透かし見的にとらえられるものと規定した。

両者の肉は、対象化してとらえることが不可能であるという点で一致する<sup>17</sup>。Depraz は肉については通常の意味での反省は不可能であるが、認識とは別種の「伝播性」というあり方において、より鋭敏に鮮明にとらえることができる<sup>17</sup>と述べた。この伝播性をメル口=ポンティの肉の概念にも認めることができれば、触覚と視覚(聴覚)を基本モデルにしたこの概念をより広げてとらえることができ、メル口=ポンティの芸術論に新たな領域を認めることができる<sup>17</sup>と考えられる。メル口=ポンティの次のような箇所注目したい。

「触れられるものと触れる者との円環があり、触れられるものが触れる者を掴まえる。また、見えるものと見る者との円環があり、見る者も見られるという存在なしにあるのではない。さらに、触れられる者が見えるもの<sup>17</sup>に書き込まれ、見る者が触れられるもの<sup>17</sup>に書き込まれ、またその逆でもある、という事態さえある。最後に、私が見たり触れたりするのと同じタイプ、同じスタイルをもったすべての身体へと及ぶ、これら諸円環の交換の伝播(propagation de ces échanges)が存在するのである。そしてこうした事態は、感ずる者とならびに感ぜられるものの根本的な核分裂または分凝によって成立し、この核分裂と分凝が側面的に私の身体の諸器官を交流させ、一つの身体から別の身体への推移性を基礎づけているのである。」(186 下線筆者)ここでは、Deprazの「伝播性(diffusivité)同様、メル口=ポンティの「伝播(propagation)も、核分裂のイメージで、爆発的なエネルギーをもって拡散・蔓延していくものとしてとらえられている。そしてこの引用での交換の伝播(propagation de ces échanges)は二重の意味を含んでいる。一つは諸感官の交流と伝播、他方は自己の身体と他者の身体の交換と伝播であるが、本論では前者のみを扱うことにしたい。

『見えるものと見えざるもの』の研究ノート 1959年11月「諸感官(sens)-次元性-『存在』」と題された部分では次のように述べる。「それぞれの感官は、一つの『世界』である、すなわち他の諸感官に対してその内容を伝達することは絶対に不可能であるが、それにもかかわらず、一つの『あるもの(quelque chose)』、つまりその構造によって直ちに他の諸感官の世界へと開かれており、これら諸感官とともに唯一の『存在』をなすところの『あるもの』を構築するのである。-中略-知覚はまず諸物の知覚ではなく、諸原質の、世界の諸々の輻の知覚であり、それ自身諸次元であり諸世界であるような諸物の知覚なのである。」(1267)ここではDeprazと同様に「融合」といった意味での感官の交流は退けられ、各々が自律的でありながらも、互いに浸食するあり方で一つの世界を成すこと、またその根拠としての原質(肉)が述べられている<sup>18</sup>。Deprazが伝播性の特徴として述べた「ある感覚の他の感覚に対する浸食(empiètement)の諸々の様式」は共感覚的なものとしてとらえられるだけではない。知覚が諸事物の知覚ではなくて、原質の、見えないものの知覚といわれることから、知覚は感覚可能なものの側にのみある事象ではなく、『あるもの(quelque chose)』(原質=肉)と深く絡み合う事象と考えられる。

それではこのメル口=ポンティの「伝播」の内実をどのようにとらえ得るか。伝播の素地

としての肉は、見えないものでありながらも観念として感覚可能なものを通じて接近できる。メル口 = ポンティはしばしばこの見えないものと観念の絆を描いたものとしてプルーストをあげる。例えば1960-1961年の講義ノートの中で『失われた時を求めて』の小さな楽節」から長い引用を行っている。その箇所について抜粋すると

「...スワンは音楽の種々のモチーフを、べつの世界、べつの秩序に属する、真の観念とよばれるべきものとみなしていた、それは闇で覆われた、未知の思想であり、理性が入り込めないものであった...音楽家にひらかれている領域は、七つの音の貧弱な鍵盤ではなくて、際限のない、まだほとんど全体にわたって知られていない鍵盤であり、そこにあっては、鍵盤を構成している愛情、情熱、勇気、平静の幾百万のキーのうちのいくつかが...数人の大芸術家によって発見されたので、その人たちこそ、彼らの見出したテーマと交感し合うものをわれわれの中に呼びさましながら、どんな富が、どんな変化が、我々の空虚とみなし虚無とみなす魂のあの入り込めない絶望的な闇の中に知らずにかくされているかをわれわれにみせてくれるのだ...その小楽節は我々の内的領域を多様化し多彩化する豊かな富である...」

(プルースト『失われた時を求めて』、井上究一郎訳、ちくま文庫00年、588 - 590 頁より抜粋、網掛け強調筆者)

メル口 = ポンティは上記の長い引用の後、ここにある「闇」や「富rich(esse 豊かさ)について次のように述べる。すなわち「この『内的領域』は装飾物を飾られて多様化するために見えるものを取り込むが、この見せかけの闇の中やその空虚の中に、芸術によって明らかにされる、いや芸術が明らかにするところの『富』(豊かさ)がある。そしてこの豊かさは芸術によってほぼ見えるものになるが、その彼方を指すのである。<sup>19</sup>ここでいわれる内的領域とは肉のことを指し、その多様化や多彩化は、Deprazのいう伝播性でとらえられる肉と重ね合わせることができるであろう<sup>20</sup>。肉における伝播的なあり方とは、まさにプルーストのいう『富』(豊かさ)であり、芸術こそがそれ生み出して感覚可能なものを通じて接近可能なものにするのである(スワンが聴いた小楽節の5つの音のように)。

さてここまで、メル口 = ポンティの「交換の伝播」に関してDeprazを援用しつつそこに共感的なものを確認し、芸術が看取可能にする肉の伝播の内実について考察した。次にこの分析を発展させるかたちで、メル口 = ポンティ自身は触れていないながら、プルーストの名高い嗅覚と味覚に関する記述を分析してみよう。

「...私は...機械的に、一さじの紅茶、私がマドレーヌの一きれをやわらかく溶かしておいた紅茶を、唇にもっていった。しかし、お菓子のかけらのまじった一口の紅茶が、口蓋にふれた瞬間に、私は身ぶるいした、私の中に起こっている異常なことに気がついて。すばらしい快感が私を襲ったのであった、孤立した、原因のわからない快感である。その快感は、たちまち私に人生の転変を無縁のものにし、人生の厄災を無害だと思わせ、人生の短さを錯覚だと感じさせたのであった、あたかも恋のはたらきとおなじように、そして何れも貴重な本質で私を満たしながら、というよりもその本質は私の中にあるのではなくて、私そのものであった

…一体どこから私にやってくる事ができたのか、この力強いよろこびは？それは紅茶とお菓子の味につながっている、しかしそんな味を無限に超えている…それから私はふたたび自分にたずねはじめる、いったいあの未知の状態はなんであったか…私の内部で何かが生じるのを私は感じる、それは沈んでいる場所から動き、上に上がってこようとする何かであり、非常に深いところで、錨のようにひきあげられようとした何かだ。…なるほど、そのように私の底でびくびくしているもの、それはあの味に結びつき、あの味のあとについて私の表面にまであがってこようとする映像、視覚的回想にちがいない、しかしそれはあまりにも遠くで、またあまりにも見さだめにくいかたちで、動いているのであって…突如として、そのとき回想が私にあらわれた。この味覚、それはマドレーヌの小さなかけらの味覚だった、コンブレーで、日曜日の朝…しかし古い過去から、人々が死に、さまざまな物が崩壊したあとに、存続するものがなにもなくなっても、ただ匂と味だけは、かよわくはあるが、もっと根強く、もっと形なく、もっと消えずに、もっと忠実に、魂のように、ずっと長いあいだ残っていて、他のすべてのものの廃墟の上に、思い浮かべ、待ちうけ、希望し、匂と味のほとんどが感知されないほどのわずかなしずくの上に、たわむことなくささえるのだ、回想の巨大な建築を。」

(プルースト『失われた時を求めて』、井上究一郎訳、ちくま文庫00年、74 - 78 頁より抜粋、網掛け強調筆者)

ここで述べられているのは、従来言われてきたように<sup>21</sup>マドレーヌによって劇的に呼びさまされる回想(過去)の生起という事態だけであろうか。ここにはまず、マドレーヌをきっかけにした共感覚的なあり方が明白にみてとれる。匂いや味こそが、複合的な感覚性によって世界をとらえるのであり、またそれゆえに匂いや味と絡み合った体験は深く、想起も鮮やかである。しかしそれだけではない。プルーストが描きだすのはマドレーヌの匂いと味を通じて当時のコンブレーでの生活が強烈に再現されたことそのものではなく、その絡み合った感覚性の背後にある「貴重な本質」、私の中にあるのではなく私そのものである本質である。そしてプルーストが味覚と嗅覚を使用して鮮やかな手口で私たちに観念の世界に引き入れ、またその後丹念に小説で辿ったのはあらゆる感覚を動員して繰り広げられる豊かな世界であり、その根底にある時間の本質をめぐる哀切な観念なのである。

共感覚的な感覚可能なものと豊潤な観念の絆には、(プルーストの書く)愛の本質を呼び覚ますヴァントウイユの音楽として、また見えない世界へと一挙に連れ出すマドレーヌの味について記述した小説として、これら芸術を介してはじめて近づくことができたのであり、芸術とは過去から未来へと伸びるこうした不断の努力であり続けるものといえよう。

以上、メルロ＝ポンティがあくまでも視覚と触覚に限って展開してきた肉の概念を、交換の伝播として視覚と触覚に限らない感官の交流、および肉にもたらされる『富』、豊かさとして見出した。メルロ＝ポンティが視覚に固有の「隔たり」「距離」を重視したことから、これを欠いた嗅覚と味覚を彼の肉の論に看取することの困難さを指摘する向きもある。だがその一方で、肉のモデルが根源的には触覚であったことを想起しなければならない。視覚が触覚のヴァリエーションとして理解されるなら、嗅覚や味覚も触覚のヴァリエーションに含まれない



理由はないのではなかろうか。匂うことのできるもの / 嗅ぐ者、味わうことができるもの / 味わう者の間に、触れられるもの / 触れる者と同様の可逆性を認め、これらの感覚を可能にしている、闇に覆われながらも富をもつ肉の生地を、まさに芸術を通じて見出すことができるのである<sup>22</sup>。

#### 4 . 結びにかえて

フッサールの厳密な学としての現象学は、「見ること」(erschauen)をその根本的方法として現象をとらえようとした。しかし全てが最初から見えるということではなく、表層(見えるもの)を根拠づけている深層(見えないもの)が存在しており<sup>23</sup>、フッサールはその解明を発掘に例えてアルケオロジ(考古学)と呼んだ。フッサール以降の現象学の継承・発展の中でも(メルロ＝ポンティも含め)、見えることを基調にしつつ、それに切り離しがたく結びつく「見えないもの」が常に問われてきた。そしていずれにせよこの「見えないもの」を「発掘する」一つの有効な方法が、芸術であるとみなされてきた。

本論の趣旨はこの「見えること」と「見えないこと」の意味を問い直し、世界の現れを嗅覚や味覚を含めたより広く、また浸食し合った感覚性に戻すことであった。そのためにフッサールの肉に独自に「伝播性」のあり方を看取しようとしたDeprazを梯子として、メルロ＝ポンティの肉における「交換の伝播」の内実を、従来のメルロ＝ポンティ解釈より踏み込んで論じてきた。

ところで本論では検討することができなかったが、メルロ＝ポンティの交換の伝播にはもう一つの側面がある。先に触れたように自己の身体と他者との交換の伝播の問題である。本論では検討することができなかったが、肉が私と世界とを結んで広がる同一の生地であるなら、また私の身体と他者の身体の間にも肉の可逆性が保証されているなら、自己と他者の交換の伝播もあり得ることになり、私は世界を他者と共有する<sup>24</sup>。カントに代表される伝統的美的感性論は、味覚を対象の表象化が不可能であるがゆえに主観的・内的感覚として美的判断の範疇から外し、したがってそれらいわゆる「低級感覚」を他者との共通感覚的なあり方から排除した。しかし、肉の概念はこうした表象化とは別のやり方で、嗅覚や味覚を含む美的なものとの共通感覚的かつ他者との共有のあり方を保証すると考えられる。今後は共通感覚の基盤としての肉の交換・伝播についても検討していきたい。



## 1註

本文中、メルロ＝ポンティの著作からの引用は次のような略号を用いる。

PP...*Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945.

(『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982年)

VI...*Le visible et l'invisible*, Gallimard, 1961.

(『見えるものと見えざるもの』中島盛夫訳、法政大学出版局、1994年)

□Nathalie Depraz. : "Phénoménologica" 160, *LUCIDITÉ DU CORPS De l'empirisme transcendantal en phénoménologie*, La Haye, M. Nijhoff, 2001.

(『思想』2000年第10号に本著作第1章「身体の超-感覚」第3項 *Transcendentalité des sens charnel : la diffusivité* (pp.17-35) が訳出されている。本論の引用は該当部分についてはこの翻訳に依拠している。伊藤泰雄訳「肉の感覚の超越論性-伝播性の仮説」pp.132-158。)

なお Depraz の近著には

- ON BECOMING AWARE. An experiential pragmatics (en coll. avec F. J. Varela et P. Vermersch), Boston/Amsterdam, Benjamins Press, 2003.

- *Comprendre la phénoménologie : une pratique concrète*, Paris, A. Colin, 2006.

- *Le corps glorieux. Phénoménologie pratique de la Philocalie des Pères du désert et des Pères de l'Eglise*, Bruxelles, Bibliothèque philosophique de Louvain, 2008.

- *Lire Husserl en phénoménologie : Idées directrices I*, Paris, P.U.F/Cned, 2008.

などがある。

<sup>2</sup> こうした芸術論で諸感覚を局在的に芸術と関連付けて述べているものに Thomas Munro, *The Arts and their Interrelations* (The Liberal Arts Press, 1949) があるが、この著作は珍しく香水(嗅覚)や料理(味覚)にも「低級感覚芸術」として言及している(p.136)。

<sup>3</sup> 『知覚の現象学』において、メルロ＝ポンティは物体として対象的に把握される「客観的身体」と、暗黙のあり方で内的に自分の身体として意識される「現象的身体」とを区別する。客観的身体の根底において、現象的身体は常に知覚世界に暗黙の意味付けを行っている。この意味で世界は受肉した主体によるのみ把握され、身体から浮遊した上空飛行的な思考が否定される。この著作の段階では、諸芸術は知覚の「暗黙の意味」を露わにするものとして構想されたが、なぜそれが可能になるのかは明確に論じられていない。

<sup>4</sup> 「似ている」ということ。フッサールにおける類似の概念。

<sup>5</sup> メルロ＝ポンティの「肉」と「肉の昇華」については山形頼洋『声と運動と他者-情感性と言語の問題』、萌書房、2004年、第15章「肉と芸術」を参照。

<sup>6</sup> Depraz は、フッサールが講義において *Körper* を主体的に生きられた身体、また *Leib* を客観的物理的物体とすることがあることから、両者の間に厳密な二項対立的関係があるのではなく、循環構造がみとれ、両者の質的表現が多岐にわたると指摘する。例えば列挙するだけでも *physischer Körper*、*physischer Leib*、*leiblicher Körper*、*Leibkörper körperlicher Leib*、*körperliche Leiblichkeit*、*Körperleib* などという表現が散見される。Depraz, *LUCIDITÉ DU CORPS*, p.3.

こうした指摘は Depraz 自身が参照しているように、すでに フッサール 1907 年「物講義」の仏訳者である Lavigne も註で述べていた。Lavigne はフッサールの *Körper* が最も主観的な内的経験に立ち現われてくるような「私の」身体として記述されることがあり *Leib* もまた明らかに物体に属していることが見られると述べている。こうしたことから、フッサール自身が講義やノートの中で両者の段階的なつながりを意識していたことは明らかである。またこの註で Lavigne は「神学的文脈においては『肉』は『精神』(esprit) に対立する。肉は神学的文脈では、個体化される *individualisé* ) のものでも、個体化しつつあるもの (*individualisante* ) でもなく、個体化下部構造の (*infra-individuelle* ) 審級とみなされている。それが欲望の力や人間の振る舞いである限りにおいてだろうと (新約聖書マルコ福音書 14 - 38、ヨハネ福音書 3 - 6、ローマ書 7 - 5)、肉体を持つ個人が解消してしまう属的本質である限りにおいてであろうと (イザヤ書 40 - 5) そうなのである。」と述べている。Edmond Husserl, *Chose et espace Leçon de 1907*, traduit par Jeans-François Lavigne, P.U.F., 1989, p.448) この Lavigne の註のように、肉の概念を神学的概念と相いれないものとするにせよ、受肉の概念が明らかにキリスト教に由来するものであると考えるにせよ、肉の神学的側面に関して今後検討の余地がある。

<sup>7</sup> Op.cit.p.10

フッサール自身が *Phénoménologische Psychologie* において身体を三層構造としてとらえていた (9/69) (『ブリタニカ草稿』、田原八郎抄訳、せりか書房、1982年、103頁)。

1)lebloose Dinge 2)physische Organismen 3)animalische Wesen mit einem Seelenleben

<sup>8</sup> 【表】の各段階を Depraz の記述にしたがってまとめる。

(1)「物理的で生き生きしていない身体」(lebloose Dinge 9/69)で、身体は物質的対象として鉱物学や地質学の範疇に入らないいわば厳密な意味での Körper、physische Körper であり、デカルトのいう延長としての物体である。我々の主観性というフィルターをかけられる以前の対象としてのこうした物体からはじめて、身体は肉へと連続・段階的に主観化されていくことになる。

(2)植物・動物・人間に共通の生命としての有機的身体である。「生命体」として(これを animation, Beseelung とする) Körper ではなく Leib の段階に到達しつつある。しかし先の Körper との間に断絶があるのではなく、動物や植物、人間に共通の基盤を physischer Leib としてもっており、いまだ生物学的な身体には Körper と Leib のダイナミックな循環がある。

(3)生きられた身体は自分自身について反省的内在知を持たないまでも、ハビトゥスによる自発的で無意識なノウハウ(savoir-faire)を持ち、環境との適合能力を与えられている。フッサールはこうした運動・知覚する身体を Leibkörper、または leiblicher Körper と名付けているが、つまるところ世界への志向性を同時に投企する場合にのみ、この生きられた身体となる。こうした生きられた身体を特徴づける内的志向性は、その非-反省的かつ無意志的次元によって未分化で未到達の段階に留まっている。

(4)(3)と異なり、超越論的還元によって自らを統覚(apreceptif)し、肉として自らを認識・意識する身体的肉の段階である。そしてこの肉は内的変質(alterité)を含み、個別的であると同時に社会的・歴史的・文化的なものを可能にする共通の精神(Gemeingeist 4/236)をもつ。

(5)最下層の肉の流れ(Leiblichkeit)である。この段階では身体性や統覚的精神の側面を失って、肉は顕現せず、純粋な流れ、運動、つまり強度の内的欲動として与えられる。「肉の流れの特徴は、その感情的かつ感情的な有機的質にある。そしてこの質が我々自身の意識のより繊細でより微かな形式に接触させてくれるのである。」(Op.cit.p.9)

<sup>9</sup> フッサールにおける感覚の局在/非-局在の論は『イデーンII』でも見られるが、点的で固定化されて志向性をもつ局在的感觉に対して、ヒュレー的(hylétique)で触覚的であるような非-局在性があるとされる。こうした非-局在性は生きられた身体から志向的身体へと至るにつれて局在化可能なものへと移行する。

<sup>10</sup> Op.cit.p.14

<sup>11</sup> Op.cit.p.26

<sup>12</sup> 「私は子供の頃、初恋の頃を思い起こす。私はプラスニッツの庭師ハインのところにおいて、庭で素晴らしい薔薇「ラフランス」を摘み、その匂[Geruch]は私を魅了した。私は思い出の中に生きているが、しかし思い出しているのは今である。「今」は意識に対して完全に消え失せていなかったのだが、とはいえ私は「今」の中ではほとんど生きてはおらず、そのためほとんどあたかも何も見ておらず、改めてすっかりあの時代にいるかのようであり、庭と薔薇を見ているかのようであり、香りを吸いこんでいる[den Geruch rieche]かのようである。客観的に、この匂いはかつてあり、ずっと以前に消え去った薔薇の匂いであるだけでなく、この匂いは嗅感覚[Geruchsempfindung]、私の嗅覚も対応しており、私はあたかもそれが生き生きしているかのようにそれを感じる[spüre]が、しかしそれは「今」ではない(それは単に思い出された「今」である)、私はそれを「鼻の中で」経験し、その匂いは私の嗅覚野[nachschmeckfeld]を満たし、鼻の触覚野[Tastfeld]を呼び覚まし、そのこと自体によって、現在やはり私の鼻である同じ鼻の中で感じられ続けている[empfunden]のがわかる。私が「今」に対して注意を払うならば、私は自分の鼻に今度は別の匂い、たばこの臭いを結び付け、この臭いが現在私の嗅覚野を満たすのである。もし私がその野に注意を払うならば、それは私の鼻が同一であるのとまったく同様に同一である。ただこの野は別様に満たされているだけである。あるいはまた、私はハインリッヒと共に擦り傷を、筋肉感覚を、痛みの感覚を、笑い等々を、思い出す。私はその中に生き、ある意味で私はそれらすべてを『私の肉の中に』経験する。」

Op.cit.p.27 cité de Husserl, Ms. L I, 9, 7a-7b (『遺稿集』(1917-1918)より)

<sup>13</sup> Ibid.

<sup>14</sup> Op.cit.p.29

<sup>15</sup> Depraz はメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』における共感覚を批判している。「たとえメルロ＝ポンティが、フッサールよりはるかに、共感覚現象を細部にわたり力強く記述したとしても、彼はそれを、知覚の中にはなく運動性の中に根を張る『身体の一の位置』、『身体全体において先ず悟られるある種の緊張』(PP244)へと結局追いやってしまう。最終的にメルロ＝ポンティにとって、共感覚は『運動感覚』にその創設的意義をもつ」(Op.cit.p.30)。

<sup>16</sup> その例示として乳児の口腔体験と大人の味覚の比較が行われる。幼児の口腔体験は散漫(diffus)で差異化されていない性格(反省されない生きられた身体の水準)にとどまるが、大人になると二次的学習によって共感覚的で敏感な性質を求める(肉の水準)。Op.cit.p.32

<sup>17</sup> 肉の概念に関するフッサールのメルロ＝ポンティへの影響関係をここで詳細に論じることはできないが、『見えるものと見えざるもの』の研究ノートに後期フッサールに関する記述が多いこと、とりわけ生活世界(Lebenswelt)への高い関心や、他にも chair を Leib と同格名詞として言い換えている点(VI 303)、また「哲学者とその影」においてフッサールの *haht* (生身の) という語から chair を導き出している箇所(Merleau-ponty, *Signe*, Gallimard, 1960, p.211)など、フッサールの肉概念との深い関連があるこ

とを指摘しておきたい。

<sup>18</sup> 「諸感官の交流と伝播」については、上の引用では感覚可能なものとして視覚と触覚をクロスする共感的なあり方が示唆される。メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』でも「身体による諸器官の統一」として散漫な (dispersion) 諸感覚を総合する身体の機能について記述している<sup>19</sup>。しかしながらその統一は客観的身体の底部にある現象的身体が行っているものであり、両者の関係も、対象との関係も明確にはされていない。(Merleau-ponty, *Notes de cours 1959-1961*, Gallimard, 1996, p.194)

<sup>19</sup> Merleau-ponty, *Notes de cours 1959-1961*, Gallimard, 1996, p.194

<sup>20</sup> プルーストは小楽節についても「薔薇の匂い」(350頁)「香水」(398頁)、「冷氣」(588頁)といった共感的あり方を描いていた(『失われた時を求めて』、ちくま文庫、2000年)。

<sup>21</sup> 嗅覚や味覚から過去の記憶が呼び覚まされることが「プルースト現象」とされるが、小説の中のマドレーヌは、過去を呼びさましただけでは無いというのが本論の主張である。

<sup>22</sup> 嗅覚、味覚によって「透かし見的に」にとらえられる観念は、共感覚を通じて現れる。例えば日本の嗅覚を用いる芸道である香道では、一人で高価な香木の香りを賞翫するにとどまらず、複数で季節に応じた古典文学をモチーフとしたゲームを通じて、より深く香の世界を堪能する。香りが意図的に共感覚を喚起する場の設置によって増補され、参加者において観念の世界が共有される。味覚も同様である。食卓の花、音楽、楽しい会話に増幅される味覚は忘れがたいものになる。プルーストの描くマドレーヌ体験のように。

<sup>23</sup> フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、細谷恒夫・木田元訳、中公文庫5年、第2節

<sup>24</sup> 肉の普遍性 (généralité) と共通性。「見えないものとは (見えるものが自らの背後に引きずっている見えないものすべてとともに) 我々にとって共通の『存在』 (Être) であり、芸術家の言語は (間接的で無意識であっても)、この『存在』へ我々が共通に参加するに至るやり方である」(Op.cit.p.196) カントの共通感覚の新たなかたちとして肉をとらえることの可能性、またはVisibilité, généralitéを、「私のものとするにできない意識の流れ」の深層 (Ego, Urimpression) と同様、肉に位置づけること (他者との握手という方法ではない、他者との交換のあり方) は可能か。メルロ＝ポンティとカントの第三批判に関して、マウロ・カルポーネ「可感的なものと剰余-メルロ＝ポンティとカント」が示唆的である。(メルロ＝ポンティ『フッサール幾何学の起源講義』加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均訳、法政大学出版局05年、237-272頁所収)